

今週の
一冊

貨幣の誕生

朝日新聞社・本体価格一四〇〇円

三上隆二 著

今日にも通じる古代貨幣の問題と制度デザインの蹉跌

評者 北村行伸・慶應義塾大学客員助教授

この本の目次

- I 東の貨幣、西の貨幣
 - 1 貨幣はなぜ、金属製なのか
 - 2 西欧型貨幣
 - 3 東洋型貨幣
 - 4 金銀銅の東と西
- II 皇朝十二銭
 - 5 謎の多い貨幣——和同開珎
 - 6 和同開珎をめぐる国際情勢
 - 7 貨幣の経済的用法
 - 8 蓄銭叙位法とは何だったのか
 - 9 貨幣経済の限界
 - 10 失敗した「貨幣大実験」
- III 古代人と貨幣——貨幣の古代的機能と用法
 - 11 銅貨の場合
 - 12 銀貨製造の顛末
 - 13 開基勝宝の復活
- むすび 幻の銀貨——大平元宝

今年一月九日に奈良・黒塚古墳の石室から邪馬台国所在地論争の鍵を握るとされる三角縁神獸鏡の発見が発表されて以来、古代史ブームに再び火がついたかの感がある。三角縁神獸鏡より時代は少し後になるが、唐の開元通宝をコピーしてわが国初の貨幣、和同開珎が製作されたのが和銅元(七〇八)年八月、藤原京においてであった。

あらかじめわが国の貨幣史を概観しておく、和同開珎以来、皇朝一二銭といわれる国産の古代貨幣の奈良・平安時代、社会動乱とともに国産鑄貨の流通、生産がストップして中国の鑄貨(宋銭、明銭)が流通した鎌倉・室町時代、徳川家康によって確立された安定的な江戸時代の金銀銅の三貨幣併用制度(三貨幣制度)、明治時代以降、中央銀行が貨幣を独占的に発行する近代的貨幣制度へと変化してきている。本書は和同開珎以来の古代貨幣についてさまざまな側面から

論考を加えたものであり、貨幣史、古代史に関心のある読者に限らず、経済制度デザイン、経済政策に関心のある読者にも刺激を与えてくれる一冊である。とりわけ貨幣制度の導入時におけるさまざまな問題点とその政治的対応が幅広く議論されており、いくつかの議論は極めて今日的な意義を持っている。

古代貨幣の崩壊

まず本書のタイトルになっている「貨幣の誕生」に関しては次の二点が強調されている。

(1) わが国における貨幣は、経済理論が示唆しているように交換経済から自発的に発生してきたものではなく、政府が当時の超大国中国に倣って、律令制度則点文字、元号と並んで上から導入したのである。実際、貨幣経済は全国規模では発達しておらず、政府は貨幣流通のために多くの施策を行なった。例えば、価値の尺度として貨幣を用いる

べく穀六升は銅貨一文に等しいと規定した(和銅四年五月)、などである。なかでも極めつけは「蓄銭叙位法」で、貯蓄した銅貨を政府に供出し、その多寡に応じて位階を昇進させるという制度である。著者は、この制度は中国にはなく、わが国独自のユニークな制度ではないかと指摘している。これは見方を変えれば、最古の貯蓄推進活動とも評価できるのではないだろうか。

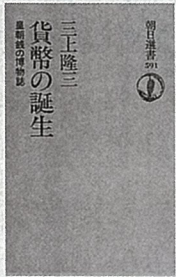
現実にはこれらのさまざまな施策にもかかわらず、貨幣は意図したようには流通せず、畿内

の一部でのみ流通するにとどまった。また、これらの貨幣も経済取引の媒体としてではなく、地鎮、安全祈願、長寿、冥途の安全などを願う呪術的目的で用いられることが多かった。

(2) 世界の貨幣史の中では、金銀を貨幣の素材として用いるヨーロッパ型と銅を素材とする東アジア型に分けられる。東アジアでは金が当時、それほど多量には産出していなかったという資源制約上の理由もあるが、ヨーロッパのように権力者の資産としての貨幣ではなく、不特定多数の人が経済的交換手段として用いる貨幣の素材には銅で十分であったということもある。つまり、わが国の貨幣は発行当時より、実質価値よりも名目価値の高い名目貨幣であったことを意味する。この違いは重要である。

古代貨幣は平安時代の天徳二(九五八)年の乾元大宝をもって鑄造されなくなった。この「貨幣の崩壊」現象についても著者は興味深い指摘をしている。貨幣の実質価値より名目価格のほうが高い場合には、政府は貨幣発行によってシニオレッツ(貨幣発行益)を獲得できる。その場合、貨幣は信認のうえに流通しており、それが失われると富としての価値が小さいだけにいつきに流通しなくなる。このことが歴史的に証明されている。

本書を、わが国が諸外国の制度をとり入れ、しかもそれに適当な変更を加えながら、制度的には必ずしも成功しなかった制度デザインの蹉跌の歴史と読んでも面白い。なお、著者は宋銭、明銭などの渡来銭については、『渡来銭の社会史』(中公新書)、江戸時代の三貨幣制度については『江戸の貨幣物語』(東洋経済新報社)を著しており、あわせて読まれることをお勧めする。



著者のプロフィール
みかみ りゅうじょう
和歌山大学名誉教授。

1926年生まれ。東京商科大学卒業後、和歌山大学経済学部教授等を経て現職。主な著書に『ケインズ経済学の構造』(有斐閣)、『円の誕生』(東洋経済新報社)、『経済の博物誌』(日本評論社)、『渡来銭の社会史』、『円の社会史』(中公新書)など。